日本國歌

日本医政

白井文庫

自序

我が神、某島の椰子の下に生れたまふや、直ちに宣ひけらく、「我に整調の琴と良く彎曲せる一張の弓とを與へよ、我はこの二の物を以て天意を普く人間に垂示すべきなり」と、今この神語を傳り來りて卑しき我が小詩集の序と爲すが如きは、ああ亦少壯の自强なるかな。

紀元節

目次

日本國歌……（一）
亞細亞……（七）
フランチェスカ……（一四）
オフェリア……（一六）
ロヴレライ……（一七）
西伯利亞……（二一）
闇のうちに……（二八）
全地球圖を展べて……（三二）
新春……（三八）
荊棘冠……（四三）

朝のいましめ……（四九）
戀の手ぶれ……（五六）
ヴィクトリア……（五八）
海のことば……（六一）
アギナルド……（六八）
薛錦琴……（七五）
大光明に對して……（八〇）
機おり唄……（八五）
圖南の篇……（九四）
望北の歌……（一〇二）
處世の詩……（一一三）
附錄
伊非諾、いざなみ……（一）

日本國歌

平木白星

日本國歌

一

巨大の天靈日に日に新に
不滅の光明の赫々たる間は

我が爲すつとめの無窮無限

二

足ることと知らぬが我、この精神
勝るを好むが我、この習慣
一死を誓ひて斷行せむ

慕ふて來らば疑惑つゆ無く
新酒を献げて敵をも容るに
天より寛なるわが心膽

四

將帥賢く堅艦そなはる
國々あれども、我、國としては
威德を旨とす三千年

五

右手には亞米利加、左手に清、英
自由の貿易、我、商としては
さもこそ天秤のその中心

六

自然の力を人事に用ゐて

「鍛鐵」「鑄鋼」二つをつとむる
文明これより新紀元

七

三尺無反の劍は無くとも
平和の詩をもて萬馬を走らせ
凱歌をあぐべき機一轉

八

皇天苟し夫れ唯一なりせば
何とて人心相去り離るる
「大我」に合せよ唯我、自慢

九

豆より小なる坤球東西
鬪ふおろかさ、いていざ一人の
主權の下にて親和なさむ

十

酒には濁らぬ泉をこそ飲め
妻には穢れぬ女をこそ娶れ
上には則ちわが日本

十一

世界は日本の一の名にして
日本は世界のまた假の名ぞと
我が父その子にこの遺訓

十二

ああ我が任務は世界の統一
ああ我が抱負は人類共同
千載これをば言ひ傳へむ

亞細亞

南北に控く磁石の針の
二強の間に餘喘を保つ
高麗半島たとへば夫か
相語るべき丈夫とて無く
金釵よるよる亡國の歌

耳を掩ふて大江を過ぎ
かの堯舜のあとを訪へば
こゝもさながら渾沌として

四千の星霜一夢の如く
三歳ながら白髪となり
自ら覺むべき期もあらじ
寧ろ如かむや師父の腕に
清を懲して清を導き
寧ろ如かむや、清人の手に
支那聯邦を更に建てむに

南の方ウイクトリア領
天は十雨の惠を垂れず
妹は夫を刺し夫の肉を食み
親は子を裂き子の血を啜る

ああ哀れなる羅摩耶那のすゑ
因陀羅は今ありやあらずや
白人の夢こまやかなるに
東海何ぞかくは慘たる

指かゞなへて數へ來れば
安南緬甸は雲烟の如く
平和の洋の八十の小島は
糸を離れし佩玉の如きか
比律賓もかつ涙多きに
暹羅の王チュラロンクルン
ああ幸に健在なりや

一たび烏拉の山より起り
北斗を指して西伯利亞に入り
西は土耳古の都を建てし
亞細亞の餘勢今はたいかに
芙蓉ほろほろ風無きに落ち
紅雀の聲、腸を斷つ

伊、蘭、墺、佛、英、米、獨、露
汝を容れて猶あまりある
功名の野に請ふ來らずや
遺寶空しく千秋の歎

さもあらざれば半神の人
かのアクバルの莫臥兒より出で
洪秀全の花縣に起ちし
まッその如く名も無き里の
屠者の群より不圖あらはれて
劍を拔いて百縣を割き
何ぞ四方を睥睨せざる
舌を揮つて萬衆を說き
何ぞ亞細亞を統一せざる
經營なかばによし破るゝも
遺業いさゝか秩序を生じ

ここに面目を一新せむ

或は詩客、　平和をうたひ
天御中主の神の威を
いやしき賤の筆にいたゞき
一の天をひとしく仰ぐ
人と人との心をつなぎ
歐亞かたみに『キビタス、ダイ』の
鳳鸞翼を合す契を
日本の手もて結ぶ日あらば
亞細亞文明第二のあした
更に大局を一新せむ

扇にゑがく三つの巴の
巴の如く史はくりかへし
天の一方からくれなゐに
人文夙く東にひらけ
やがて西へと日は移りつゝ
一たび羅馬希臘をよぎり
コロンビアより波に入りしも
ああ亞細亞久しく暗ならむや
今や再びめぐりめぐりて
世の文明の第二のあした
また日本よりあけそめなむか

フランチェスカ

何かは勝らむこの憂愁
Nessun maggior dolore,
幸多きむかしを思ひいづる
Che ricordarsi del tempo felice
憂き身の果、とは君が師も知る
Nella miseria; e cio sa'l tuo Dottore
さはさりながら悲き戀の

懺悔を君が望みたまはゞ
涙を拂ひて語りはべらむ
ある日、互みにうれしと讀みしは
ランチロットが戀物語、
憚りも無くわなみわが夫と
四つの眼一つにたどり通はせ
讀みゆくうちに頰のくれなゐも
青ざめしまで二人を襲ひしは
戀の主が待ちに待ちたる
微笑の接吻のくだりならずや、
長久に袖さしかへむわが夫の
はづかし、唇にかの時觸れぬ

ガレオットはその卷、そのつづり人
それよりかの文復た反讀すこと無き

オフェリア

君がまことの戀はたれ
彼是多き人のうち
貝の冠とその杖と
その沓にこそわきて知れ

かの人は往くあゝ君よ
かの人はゆく彼うせぬ
首は蒼き苔のもと
遺るはただの石ぞとは

雪と見つべき上おほひ衣
かをりゆかしき花の環は
追ひぬ、下なる君があと
戀の涙にしほたれて

ロウレライ

一、知らず、いかなる故のあれば
かくも心の傷めるや
舊き世がたり憶へばか
わきてそれとも定めがたき

二、氣は冷に空昏く
さても蒸因の流舒に
曄く山のみねみねは
日の沒る影に夕映ゐて

三、婀娜なる少女、そこにして
巖に裳曳くぞ怪異きや
黃金の御統珠、御手づから
黃金の髮を梳る

四、黃金の櫛に鬢搔き上げて
その時謠ふは何の歌
それに不思議の魔力ある
えもいひ知らぬ旋律にて

五、男、漁る艇のうち
胸は紊るる悲みに

岩のいただき目もをよばず
ただに高きを仰ぐかな

六、それかあらずか、　渦まく波
最期は一つ、人も舟も
歌に導くそのうたは
ロウレライこそ唱ひしか

西伯利亞

紀元千五百八十年
惠兒碼虞智麼布來子は
莫斯科の帝に罪を獲て
竊かに巨索克の少壯を率ゐ
雪紛々たるウオルカを溯り
韃靼境に的纈を立て
銀鞭一揮、『破壞』を叫び
首都イスケルを陷れしより
西伯利亞は露の有たるはじめ

始めて露領と石に標さる

西伯利亞の野を拓く露西亞は
新文明を東亞より得て
西伯利亞の市を富ます日本は
利を西歐よりまた頒たれて
歐亞、無限の戀の接吻
羞を含みて相言はざりし
戀に永遠のあゝ榮あれ

試みに我、天機を察し
再び人事を按るに

覆載の間いづれか敵ぞ
況して未來のわが友邦は
英米か、普墺か、否々々
我に戰ふべき辭柄なく
我に爭ふべき齟齬もなき
北方の强、それに非ずや

ああ疾めばぞ彼は憚り
ああ疑へば彼また猜し
ああ誤れば彼は信ぜず
ああ怖るれば彼辱しめ
畢竟彼我を明かにせず

大虚を掴む冥々のまよひ
喇叭嚠喨大陸に出で
東に覇たる狼心あらば
敵、彼得の裔のみか
獨佛とも相觸れずやは
かくて自ら亂を好まば
四千餘万の子はありとても
億の租税も夢に如かず
權謀と鐵火は疫病の如く
何ぞ民福に寸功無きや

今やこの國この野望なく
一世平和の擔保をいはば　陸軍の費を
我に貸さずや、
鬼啾々たる大平原に
耦耕の子を移し住ましめ
彼の麗さを我は導き
彼空しきを我は補ひ
彼曲れるを我は直うし
我が貿易の市場とせんは
卵を盆に立つるより易く
こゝ胸にあり百年の計

米と英と我が皇國と
見ずや未來の三つの勢權
例へば曉の虹のごとく
人世を繞る三色の環
米、平等の商業を以て
英は一如の移殖を以て
日高見の人は一の主義もて
平和を唱ふる東、南、西、北
主義とは曰く『人類一致』
この語にいかが秘密あらうや
誰か東西の圖に劒らむと

尼格拉二世の御名を贋る
咄々、彼を我怖ずして
ああ西伯利亞を我が富ますべき
天職にたゞ違ふを恐る
天秤つくるに劍をまげよ
戀と詩歌と商工業と
無窮不滅の神の御こころ
神の心を人の手に稟け
永くこの野を經營するは
清か、露西亞か、我かあらずか

闇のうちに

睡ね得る程は睡ねよ人々
無花果の果のそれより脆く
大地に落つるその命なれば

熱闘の市も夜をさまよへば
一人ただ我生き殘りたる
最後の世かと心寒けく

この夜、相倚るわが戀は無く

この夜、相語る師とて無ければ
白き腕にいだかむ闇ぞ

咫尺を辨ぬ常やみこそは
わがささやきの詞を解し
容るるに餘りある我ならめ

この顳顬のうごめくうちは
晝を領する權を罵り
闇の自由を讃へつべきぞ

ああ常闇のやみの裏には

衆愚衆悪の辭を聞かず
笹、紅の色目にうつる無し

暗きがうちに瞳を凝せば
人間がいはゆる善悪もなく
黄白紅紫ただ一ついろ

瞳を凝してくらきが裏に
何ぞ、わが眼に白くうつるは
罪の歴史のその文字なるか

瞳を凝して暗きがうちに

十五、慘たる戀を教へし
少女の俤、彷彿として

瞳を凝して暗きがうちに
ああ永刧のくらきがうちに
明、滅、不滅の光明微かなる

全地球圖を展べて

春宵しばしば夢に驚き
枕のほとり地の圖を披き
燈火を上げ一觀すれば
經緯三千五百餘万里
呼ばば應へむ髣髴として

君見ずや、わが指さすところ
曉に舞ふ蝶、さながらの
これは亞米利加、其東に

亞弗利加はさも髑髏に似たり
紅紫、英露は花のいろいろ

絹糸に貫く千代の椿の
花より花の香を慕ふごと
國より國の史を繹ぬれば
興亡恰かも夢か幻
涙潸々かつ零れつゝ

俯仰今昔三千年餘
しかも我には猶新らしく
六歳の少女がひらく繪卷の

卷きてはかへす胸の感慨
興かぎり無き今月今夜

今やこの時熱帶の地に
貔貅千万たたかふか血に
さもあらばあれ、　幾山川は
わが眉近く悠々として
靜かに天の機密を闡く

今やこの時新星あらはれ
大傑母の脇を出づるか
今や老雄、　棺に入るか

遮莫、一ひらの圖の
言はず語らぬ未來なるかな

この圖を我の頷する如く
この世をしらす全智全能
この圖を我のかざるより美に
この圖を我の裂くよりも疾く
手鞠の世をば左右すらむか

ああ夫れ大氣溢るゝところ
神明の威はあらたかにして
神明の威のかゝやくところ

人は不朽の詩を樂しみ
詩にはこもる骸骨の韻

我はやまとの血統を紹ぎ
日本の眞理を眞理とすれど
啻にこれわが眞理にあらで
白雲をりゐむかふすかぎり
世を蓋ふ不羈の心こそあれ

過去を愈しゆく枕時計の
かつがつひとり物思ふこそ
妻無き子なき夜のたのしみ

白紗垂れたるうしろの壁に
孤影やつれて伽羅の香もなし

あるひは西に或は東
五彩にわかつ國てふ國の
畢竟目的二ならねば
筆を揮てひとつの色に
染むるは我のただ力のみ

五十の春秋相あらそふは
小なる人の子の輸贏かな
其一生のをはりを見れば

今わが展ぶる乾坤の圖の
一寸をだに奪ふなくして

新春

天蒼々とこころよく——
糸を未來に舒べて思へば
飛ばすべき凧われに無くとも
童と共に春は樂しく

無想の頬はかゝやきて——
羽根こしかたに追ひつたどれば
うつべき羽子をわれ持たずとも
少女の如く心うかるる

一つの希望我あらば——
のぞみかなへと茲歳祝はむ
おもひ徹らめ、遠き慮
われ懐きなばこの年こそは

國の幸福説きとけど——
民の望を収る政畧か

よしや欺け我を安きに
措かば該撮にも從はむ

娜婀たる眉は歌によく——
堅き心をなまらす手練か
いざやいつはれわが悲を
消さば揚妃の手をも握らむ

二十四箇年非に非をつみ——
ことしも我にいよよ非なるか
新年汝、弱きこころを
傾けむとて又來れるか

我が愛ここに新らしく——
憎惡愁恨かつ多からむ
ここに我が智慧さらにふとりて
迷も闇もいとゞまさらむ

如何なるものか福祉ぞ——
忘るるに如く幸はなからむ
善も惡きも夢よりうすく
覺めて嘆きも悔もあらねば
昨日を忘れ明日をのぞめば——

胸なる妙華香もかんばしく
時は明治の第三十三
慰め多きけふにもあるかな

來れ新年、けふを壽ぐ——
かの大方の人をいざなへ
幾千とせぞやのぞみ待ちつゝ
待つには遠き天の極樂

荊棘冠

さすがに今日を限りと思へば
我が家ながらなほ珍らしく
駒を駐めて顧みすれば
十三歳のいたづらざかり
丈をならべて植ゑし銀杏の
葉末十丈高くもあるかな

今や故國に罪を得しかば
父ある子ながら父を見棄てて

子ある父ながら子をよそにして
　弓張月のいるやかなたに
西遊歸る日も定めねば
　山川の美のまさきくあれや

老たる君よ、冀くば
　子の自由をばことほぎたまへ
首に一の威權あらねば
　白鶴雲を凌ぐが如く
この手、欲する天をも攫み
　この足、いづくの土も踏むまま

我を容れざる現世なりせば
　人惑はしの一狂生は
欣んで世をしばし避けむに
　さるをさはなどわが妻は哭く
白き腕高くさしのべ
　とく加へずや荊棘の冠

心ありてか可愛の妻が
　ことさら着たる花いろ衣
思ひぞ出づる華燭の宵の
　振の袂のふるきなごりか
更に憶へば繻珍の帶の

結べは解くる緣なりけり

我が薄命を、子よ、いかに見る
一國一州めづるよりなほ
一世を愛する父はさもこそ
今の時世に佞るよりは
未來を慮ふ父はさもこそ
荆棘の冠似合はしからめ
家に遺さむ辭として無く
子に與ふべき寶もあらぬ
無情の人に何の情ぞ

ああ荆棘のこの冠や
二位の紫綬よりわれふさはしく
額に汗をおぼえざるかな
眼あまりに明かなれば
明かなるを民はいぶせく
心あまりに直に過ぐれば
其直なるを世は憚りて
わが外交を强硬に過ぎ
法令慈悲の少きを說く
さらば、さはなど人々は泣く

國、其罪に滅亡ぶる如く
時、其罪に革まるごと
人、其罪に蘇るをや
何か慨かむわが罪なれば
など爾等にかがつらふべき

朝のいましめ

雲はこもごも相聚りて
五色映麗花さく如く
拂へど去らぬ御袖の薫
わが大御神大日靈貴
夕の星のからくれなるを
朝の雲の濃きむらさきを
踏みてしとしとわが大神は
駒をいさめの三百の鞭

蹄たたすや最東のみね
弓よ彎て放つ銀の箭
にほへる眉をきつと昂ぐれば
たちまち降る百千の魑魅

『朝あしたに時を違へで
人々見るこそああ樂しかり
力めよ、慟けおのが活業
常に息まぬ我に擬ひて』

御聲玲瓏第一の令

つゞいて下す九條の啓示
仰ぐもたうと耿々灼々
聽くもかしこし天地のまこと

『きのふは夢ぞ、あすは幻
けふ善き事せばすぐまのあたり
報ひはあらむ、日に新なる
この日を賴め我に從ひ

『惡き魔その身を埃に變へて
近つき喰はむと爾を追へば
衣になゆるしぞ塵一ひらを

いつかな曇らぬわが軀のごとく

『子を護りそだて、妻をいつくしみ
親を崇み上をうやまへ
星のいろいろ、とともなふ月も
我あるからの彼にこそあれば

『事をな隠しぞ、心に祕めぞ
嫉妬、怨恨は病と耻ぢょ
世はかくこそあれ公明正大
欺るなかれ、我に鑑み

『疑ふことなく、惑ふをやめよ
見る目こまかに明かならば
迷ふべきかは唯一の道
くもりとく去れ我にまがひて

『懼るるなかれ、苦むなかれ
心に則ち過りなくば
敵破るるまで競へ戰へ
物皆抑ふる我に習びて

『足らば失ひ、盈つれば缺く
如かずあるまゝ樂まむには

圓滿にすぎてむ人の一生
久しく更へざるわが態に似て

『かげの小草の花をも捨てず
嵐をいたみて弱きを扶け
恩惠を與へよ、偏くすくへ
私無きこと我にも勝れ』

天の甘露を朱唇にふくみ
吹きすてたまふいぶきを浴みて
世は春げしき千紅万紫
駢せて臻る百のよろこび

かくてをはりに宣ひけらく
『よそほひかたちは地に朽つるとも
靈魂いよいよ高くたうとく
光明を慕ひてよりこよ我に

『一つの殊功を世にあらはさば
ほまれは盡きじその名もろとも
詩につくりて調も妙に
わがあるかぎり世々に傳へむ』

戀の手ぶれ

おもひ直ちにわれはわぎみに
下なる心、君はおのれに
つたへつたふる戀の手ぶれの
　戀の手ぶれの
わわ熱きかな御たなごころ

朝の百合の露のつぼみの
やわらかきよりさらに優き
君が五つの指をつたひて

わが血は君にそそぎけらしな
あたたかきその御ふところに

君が情は聖靈のごと
目には見えざるつよき力を
そぞろおぼえて萬づをわかず
未とこしへに戀のかたみを
今日の今より殘すならむか

一生にわが一のほゝゑみ
一生にわが一のおのゝき
ああこの時の刹那のこころ

胸さわぎして頬のあかきは
君のたまひし君が血なれや

ウィクトリア

請ふ、哀號をしばし遏めよ
悲々たる歎を忘れなむには
やごとなき人を弔はむには
懿德大業をしのびいでて
如かず、御空に高く唱へむに

嗟、ウィクトリア、アレクサンドリナ
十九世紀は始終す陛下の爲め
善と純潔は何ぞ、陛下無うして
蒼海の威嚴はいかに、陛下なうして
大陸の平和はいかに、陛下なうして

極北の民と羅甸のやから
大英を怖るればぞ陛下を畏れ
いやしき我とわが國友と
陛下を慕ふて其國をおもひしが
大姉逝く、ああ限り無きうらみ

紅の涙しばらく抑へ
西、碧瑠璃の空を仰ぎて
新らしき光輝くを見よ
女のなかの女こそかしこに
百王のその帝こそかしこに

十九世紀の花は萎みて
戀よ、國母よ、また歸らずや
せめては未來に遺さばやな
その花の香を木蘭の花の
白きは平和の徽號なれば

海のことば

西班牙の人バルボアが
『南の海』と指さしし
潮の盈乾かぎりなく
マジェラン偶々ここを過ぎ
『太平洋』と呼びしより
「名」てふ小きものの得たる

天、衆星を懐くごとく
平和の海は渺々と
七列強の愛憎を
容るるにあまる胸の裏
島は八十島八百よろづ
四海をこむる大わだつみ
さても蒼きをたとふれば
鏡にうつる朝ぼらけ
否、空よりもかつ青く
人世半は掩はれて
波また波の千萬波

無始より來り無限にゆく
穏かなるをくらぶれば
愛の眸、さにづらふ
妹の腕のまどろみか
否、夢よりもなほ安く
羅針盤、些の難なく
見かへり白き艇の蹤
四の櫂をゆるうせよ
額に手してうかがへば
マニラはいづこ、清はいづく

東西、波にわかち無く
つねに動きてつねに活き
滔々として際涯なし

嗚呼きはみ無く搏つ脈に
人見ぬところ大能の
揭焉なるをおぼえつゝ
六合やがて濃紫に
滲さむとする未來を
占ひ得たるにがき笑み

見よ、幽嚴をここにして

見よ、壯大をここにして
二十重がらみの羈絆なく
戀の口ぶれ自由なるを、
法無きをもて法とする
大海王は君か、我か

一たび『我』を知らまくせば
衆愚の喜憂よそにして
舵を南に海へ出で
悟らずや、『我』が尊きを
たうとき『我』を在らしめし
『大我』いよいよ畏きを

一指を竪てて大空に
十字を劃き且つ曰く
『法界さかしまに提げて
投ずるもなほ涸かざる
不盡の水は新らしき
幾よろづ秋、いく千春

『不盡の水を湛へつゝ
天と無窮の威を競ふ
太平洋よ、心あらば
波に詩歌をあらしめよ

政治の外の人をして
歐亞の運をためさしめ —

『風と潮のなかだちに
大なる戀をかなへしめ
黑、黄、白の差別なく
全人類を相翕せ
天父が點す聖燭の
かげに握手をなさしめよ』

大日靈の子、詩を以て
白日の夏更に誓ふ

『海より送る文明に
亞細亞を新ならしめて
光明の旗、極東に
汝の名をば
護らしめむ』

アギナルド

一

嘖嗜の毀譽そは何ぞ
一二の蹉跌そは何ぞ
丈夫一たび思ひ立ち
思ひ立ちては寢むべきか
生氣凜々アギナルド

二

知をば望まじ求眞の
詩をも願はじ樂天の
眥裂けて髮は竪つ
業を汝に唯求む
カビテの健兒アギナルド

三

自由に濺ぐため涙
五斗の熱血則ち義
一經緯儀と相對し
半夜微笑す抱負大
氣は蓋世のアギナルド

四

『西班牙誰れに讓るとも
亞美利加誰れに購ふも
我關せむやマニラこそ
マニラの爲めのマニラなれ』

嘉いかな言やアギナルド

五

希望は事の始めなり
成就爲すべき兆候なり
天は助くる比律賓
友は四方に無からむや
南方の傑アギナルド

六

今や愛兒を亡ひて
慈母には別るゝ生きながら

淪落不偶、事は非に
義人の行路つねに難
恨綿々アギナルド

七

一紙半錢空しくて
力逮ばぬ我なれど
衷心そゞろ抑へかね
西暦一千九百年
同情を寄すアギナルド

八

我のこの歌この涙
この愛いかで薄命の
奇士を慰め得ざらむや
たまたま來れ極東の
朝日しをりにアギナルド

九

左手に聖書、右に劍
白髮の將、叱咤せば
敵は踟躕すコレンソウ
クルーゲル齡七十六
老に耻ぢずやアギナルド

十

氣運新たに循環し
米や露英や一世を
統一すべき大人の
出てむを待てる今の時
彼か汝かァギナルド

薛錦琴

明治三十四年三月二十四日、南清の志士上海張園に會し、彼の露清密約は國人の意志に反することを切論するや、少女錦琴又嬌舌を揮つて舉國一致國難を避けむことを說き、終に密約をして一反古たらしめき、仝年八月、彼女渡米の途次我が東京を過ぎるに會ふ、乃ちこの詩を贈る。

大義とは虎狼陰險にして
清の平和を擾すの謂か
外人非理、弱きを凌ぐ
嗚呼果してこれ文明か

節は清明のすゑつかた
張園に聚まる五百の人

少女、姓は薛、名は錦琴
二八の戀をなほ解せずして
夙く國歩の艱難に遭ひ
紅顔、秋の愁をたたへ
憂世の士と臂を交へ
壇に上つて大衆を説く

ああ玲瓏たる天のいましめ
中華の山河いまだ亡びず

一たび語れば鬼神悲み
二たび言へば豪傑は起ち
蛾眉を顰めて三たび叫べば
大風起りて六合開く

『四億の民よ』錦琴いはく
『中國將に割たれむとして
危機の到るを知るや知らずや
狡横の國難きを迫り
人々心志齊しからねば
徒らに困を外人に受く——

『一國を思ふこと一家の如く
外、侮を禦がむとせば
冀くは東隣に依つて
一時の安きを圖るに如かむや
壯烈、彼は露に當るべく
任俠、彼は清を救はむ』

美人憤る時、涙淋漓
さすが少女の息せまり來て
早百合の花の白きただむき
熱血みなぎる胸を掀けば
雲鬢亂れて金簪は落ち

玉佩聲あり、憂々として

新密約は噫眞か僞か
清の主權を侵すは誰ぞ
一州は猶割取すべきも
烈女の心奪ふべからず
戀ならなくに我一詩あり
佳人と憂を兩分すべく

大光明に對して

高く大にして望みがたしと
三たびたゆたひし天雲のきはみ
せばめて輝く天のつかさに
問はむか、「自由」「慈愛」のいはれ

そもそも爾はいくとせを經つゝ
我と見む爲めここに存れる
われまた爾に事問はゞやと
今こそ世には顯れ出でたれ

いくその星のおもひを集めて
晝は一團の汝となるか
宵々ごとにくりかへし見れば
耳にあかざる千萬のをしへ

爾の前には啼かぬ禽なく
爾の前ににほはぬ花なし
唯我のみぞそのささやきを
解きあきらめしと念ひしものを

その往昔、くれなゐのうつし世に

さばへなす醜の惡靈、邪魔
ささらをぎささやさやに騷ぎしも
萎へうらぶれぬ「破邪の鏡」に

生れて惡き業せざる身の
對ひてさながら立ち難きは
兩舌、　驕慢はた怠懈の
何時重ねけむいかなる罪ぞ

わが眼くらくして小かなれど
際なく期なくゆく光明よ
わがことづてせよ、東に西に

そこなるかへしに我慰めよ

ああ隆なる權威を幸を
何にかたとへむ、爾と共に
晨にうまれて爾より疾く
かくるる夕の生命いくばく

ぬば玉の夢おぼつかなき世に
實在の例は爾もてせむ
まさきかれかしいや遠永く
かはらぬ力に八隅領して

過古を語らず、なりゆく末をも
知りて言はざる深き心の
いかにやいかに御空のつかさ
いざ現在をあげつらはむかな

機おり唄

一

櫨の木がくれお山の奥の
茅の假廬に棲むたをやめの
女可愛や、いろ衣を——
今日もとどろと織り出すやら

白齒娘の名はおこんとて
親も無ければたよりもつても、
辛や寂しやさればとて

誰に習たか戀、しほらしの
うそぢやあるまい、聞たか汝も
我も見て知る井堰の小六
花で咲くなら花菖蒲
姿やさしく心も直に

二

野くれ山くれ里川そふて
けふもゆくゆく井堰の小六
捩の肩あていとしほなげに
ゆくも戀から山王の御山

『山のお山のおこんはどこに
機が織れたらもらひましよ——
里へかざりの五百綾錦』

『よくはござつたさはさりながら
今日はやうやう三尺四尺
とんとんがらくころころ
明日は必ず織ても進じよ
許し下され又こそござれ
風が吹くやら此方の鬢の
ほつれ搔かしやれこの櫛に
わしが機おる唄聞きながら

『うまれいづこの名は誰様と
知らず知らぬが互の縁
うち解けそめし色絲の
戀の恨はこの片結び』

三

野くれ山くれ里川そふて
今日もゆくゆく井堰の小六
後しぶきに降る夕時雨
笠は斜に褄ひつからげ
『山のお山のおこんはいかに

機が織れたら針留めて——
我身放さぬ女のかたみ』

『よくはござつた、　さはさりながら
今日はやうやう六尺五尺
とんとんはたはたとんとほとほと
明日は必ず織り切りまする
許し下され復たこそざれ
雨が降るやらしとどに濡れた
袂乾しやれ褄焼いて
わしが機おる唄聞きながら

『末はかうよと後々くまでも
計るでもなき二人の命
ふと織りあげし大巾の
戀の名殘の紫鹿の子』

四

野くれ山くれ里川添ふて
今日もまた行く男の姿
戌刻の鐘に送られながら
裾にやつるる萩女郎花
『山のお山のおこんはいかに
機が織れたら袖くけて――

人に見せたや戀ぬれ衣』

『よくはござつた、さはさりながら
けふは彼是八尺九尺
とんとんさらくと
とんそろそろと
明日は違ず織り終へまする
許し下され又こそござれ
猿がかせぎの一味の酒を
一つ酌ましやれあはれとて
わしが機織る唄聞きながら
『堅に細々思をこめて

横に千筋は女の操
わしが心はいつまでも
松の緑の相生模様』

五

野ゆき山ゆき里川越えて
人目忍びの頬隠しつゝ
烏啼くとて月曇るとて
止めかねたる男の心
『山のお山のおこんはいかに
やがて織れたらつい縫ふて――
憂も忘れう夜の添臥に』

『布を取つたらもうこれ限り
翌日は逢れぬ歎がつらく
永い別離となるのがつらく
迷ひ迷ふて心はうつつ
一寸績げば一寸濡れて
織れば一尺涙に朽ちて
いつそ織るまいさりとては――
何といひわけお前にせうぞ
『絲に思をあかそとすれば
思ひ絶えよと生憎切れて

梭はつれなや、外れつゝ
ちぎる心を語らせまいと』

圖南の篇

（海外移殖）

噫いざさらば、君往くらむか
少時別離の掌を把り
熱き最後の情に觸れずや

一たびこの手相分ちなば
君はゆくゆく白雲のきはみ
聲も逮ばぬ南の極

請ふ君うけよ餞別の詩を
君を送るに涙無くして
鄙調一聯七十二行
薄、か雄圖を壯ならしむ
この詩膽なき男な誦みぞ
この詩謠ふな邪淫の子等は
有限渺たる東海の土は

君が無限の元氣を容れじ
況んや君の子をや孫をや
天桃の新伉儷を得て
君は珊々袂をつらね
木蘭の香にそむきてぞ行く

『二人わが夫とわが在るところ
いづち日本の名無からむや』と
臙脂の唇この語を洩らす
嗚呼君にしてかゝる妻あり
緋の縮緬を寸斷したる
この妻あるかああ君にして

南、伯剌西爾に墨斯哥に
行きては拓き拓きては住み
住みて新に紀元をつくる
戀は千秋万歳なれや
星なくもりそ英傑のため
四時花あれ佳人の爲めに

身に一纖の鐵をもつけず
心に僥倖する奇利も無く
人生の爲め憂ふるあまり
勞働をもて文明を布く

我が坤球の第一人に
この月この日この詩を贈る

大翼雲を凌ぎ凌ぎ
南の方を君窮めつゝ
天際遠くかつ顧みて
たまたま友を偲び出でなば
千々の辭を囁く波に
わが情をば請ふさとりてよ

または春ゆき秋かさなりて
君が名を呼ぶ一新疆に

萬斛の香を四隣に放つ
蓮の白妙華ひらきなば
夢杳なる絶東海の
友のおもひと請ふみそなはせ

心に關ふ政策なく
世事の紛紜君に臨まず
あゝ自由とは怎麼この謂か
到る國こそおくつきどころ
止るあたり第二の故鄉
ああ風流は將たこの謂か

いざや君往け、　天涯地角
君往くところ文明生じ
君在るところ平和は榮え
碧璃瑠の大圓蓋のもと
君住むところいづれの州か
わが誠心のかよはざらむや

東印度の帝國を建て
西は加那太の荒蕪を拓き
南、濠太剌利亞を謨め
平和の移殖、我が天職と
君見ずや、彼の索遜族の

神の大業を助け成すを
いざや君ゆけ、　天涯地角
君往くところ文明生じ
君在るところ平和は榮え
大光明の稜威のかげに
君住むところいづれの濱か
虚見つ日本ならざらむや

望北の歌

（日露親和）

喩へば玉蘭雪より白く
妍々北に秀づるごとく
大稜威こそにほひ氣高き
花には春の猶恨あり
星といはむも憚りあれど
嗚呼千はやぶる人和さむと
少時は天降るそれか否か

雲九重の高きにありて
一天の主宰、世に降りては
一億萬の民の父となり
大渾圓を七つに分ち
其一を收る御たなごころ

由緣の色のうす紫の
哀れを知れる君にしあれば
慈眼千古の理を明めて
宜こそ沈香うすれゆく世に
無窮の戀を、ときはかきはの
平和を人に宣へたまひき

君にして聞く、戀ならなくに
うち出でかねし人の眞情
君にして聞く、大基督が
本覺大悟の智慧のみことば

千八百九十有八年
時は八月八束穂の秋
檄を列國に遞へけらく
『幾億萬の兵備の巨費は
外、隣邦の敵意を釀し
内、人民の負擔を加へ
世の進善に一の効無く

彼我を牽ゐて崩壞せむのみ
請ひねがはくは軍費を省き
一世の不幸を濟はむことを』

皇祖の遺訓十五箇條は
これあらしめよ彼得の世に
天知る君の御宇にありては
君の聖慮を行はむのみ
天意に違ふが叛賊ならば
何人か、ああ帝に反きて
神、文明の光に翳す

億を指をる大みたからの
聖賢さすが數多かるを
虚喝の外に國の難を
救ふの策はいまだ知らずや
人多ければ迷もさはに
中央亞細亞、巴美爾を略り
密使を遣りて西藏に通じ
西南直ちに印度を侵し
銅鑼弦の響のうちに
やがては都を土耳古に建て
或は波斯を徇へむと稱ひ
人世の利を蔑にして

或は關税の保護を叫び
『神は萬有の始源』と説ける
杜翁を天の敵と疑ひ
二八の少女錦琴をして
慘憺の春を傷ましめてき
史は爭鬪の記錄なりせば
「露西亞」の文字は最も舊く
常にまた眼に新ならむか
極北の人、國を知ること
一人誰か君に勝れる

哥索克眞によく戰ふか
戰勝ちて何をか求むる
敗れて何をも失はざるや

該撒百世を統御せしか
歷山寰宇を併呑せしか
古瓦に彫りたる名は苔に朽ち
一斗の醉は夢より淡く
覇圖帳として已ぬるかな

露西亞、芬蘭、波蘭
現世の神秘ここにあれども

君袞龍の御衣を褰げて
秘密を披くそは立どころ

ああ偉なるかな——
唯に版圖の大にはあらで
至仁天子の叡慮に於て
花半開の御年齒にして
專制權威を繼ぎたまひてし
至聖皇帝の懿德に於て

結脈一つ糜毛一莖
無名の詩人地に跪き

闇にも著き北斗の影を
無垢爽淨の額に承けて
遙かに君の千代をことほぐ

粉壁彩瓦壞るゝところ
長き袂のかげを曳きつゝ
古琴一彈、暮秋の韻、
絃に怒の音を抑ふれど
少女の戀ぞわが歌に無き

將に露國の親むべきは
獨か英か將た佛朗西か

青波白波その東方に
地の利としては唯日本あり
彼は露西亞を初めて開き
彼は露西亞を時に勵まし
彼は露西亞を常に警め
其親交や最も古く
露西亞の大を爲すは日本か

西は全歐の大勢を
黑海に出でて握りたまふには
珠の御胸あまり靜に
東に韓の弱きを壓へ

亞細亞を制したまはむとには
あまりに優なる大御心
御沓を上げ南の方
熱帶の地を蹂躙するに
御なさけこそあまり濃き

ああ望むらくは北なる君が
優しく深く威隆々たる
天の御法を戴かましや
東に我の生れざりせば
なりてしもがなその國人と
東に我の生れざりせば

處世の詩

今日かくも我が生れしは
日々に一斗の汗をば揮ひ
わかき腕にそもいくばくの——
人を幸ひするやを驗し
『人生虛無』と囁くあらば
『否』と徑ちに答へむ爲めぞ、
勉むべきかな、歌ひつゝ

噫嘻謳ひつゝ

今日かくも我が勤むるは
家を愛するそれのみならで
苦の樂を悟るがゆゑぞ、
業を了りて一息すれば
天の凱歌雙耳に聞え
戀に不滅の慰めあれば
働かむかな、歌ひつゝ
噫嘻謳ひつゝ

今日かくもわれ働きて

過去に罪無く悔あらざれば
胸は芙蓉のいろより白く、
將來に些の惑ひなければ
瞳、星より且つ粲かに、
天に對して微笑みながら
樂まんかな、歌ひつゝ
噫嘻謳ひつゝ

我は今日かく樂みて
公、侯、伯にいさゝか愧ぢず、
德は五人の師たるに足れば
我は五人の至尊にして、

識は半世を救ふに足らば
我は半世の帝王なりと
信ずべきかな、歌ひつゝ
噫嘻謳ひつゝ

我は今日かく信ずれば
十指は他の爲め勞するも
秋の巖と心は堅く
苟初めだにも虚誕言はず、
高く、正しく自己を持して
我が一髪も輕んずる無く
大ならむかな、歌ひつゝ

噫嘻謳ひつゝ

我と命運ひとしき星は
無窮の空に一つあれども、
天職、我と同じき人は、
悠久の土に我のみなれば、
縱しや死すとも七たび活きて
一事を爲さでなど已むべきか、
試んかな、歌ひつゝ
噫嘻謳ひつゝ

天の彼方に眼を注ぎ

全力をもて事に當らば
我に憚るいかなる敵ぞ、
踵確かに歩一歩すれば
心膽天の羽々矢のごとく
高くも遠く勇みに勇み
奮ふべきかな、　歌ひつゝ
噫嘻謳ひつゝ

自ら我を愛するならば
我の外なる彼をも愛でゝ、
彼の外なる誰にも讓り、
國は一人の國ならざれば

億兆心一つになして
『自由』『慈愛』を合詞とし
相和せんかな、　歌ひつゝ
噫嘻謳ひつゝ

自ら我を尊しとせば
かくも聖なる理想を賜びし
大慈大悲の威靈を仰ぎ、
左右の掌、　虚空を擁き
畏き御手にわが唇觸れて
我はやんがて大我に合し
神たらむかな、　歌ひつゝ

噫嘻謳ひつゝ、

「實」とは何ぞ、　そは我なれば
まッこの如く歌をも吟じ、
「美」とは何ぞや、　そは我なれば
聲は嚠喨宇宙に韻き、
いはゞ「神」とは我がことなれば
唱ひ唱ひて霄のあなたに――
　ああ陞かむかな、　歌ひつゝ
　かく謳ひつゝ

日本國歌　終

附錄

伊弉諾、いざなみ

一

あはれ、いはまくもあやに惶き
威、嚴なる男神伊弉諾
いざなふとこそ、麗し女神の
御名聞こゆれ、優にやさしく

天つ御祖の御勅かしこみ
國造りなす二柱の神
あやし魔神の夜々あらはれて
凶をささやく夢はまことか
夢はまことか「日のよこ、日のたて
領せよ」といふ、「二神別れて」
「東の方にある禍津魅を
伐て」とは夢に男神聞かして

邪きものを、かくて伊弉諾
服け和さむと思し立ちける
天の威靈をかしらに戴き
取り佩きますや十握の劍
今日にとぢむる別れ宣げむと
愛婦を訪ふ伊弉諾の尊
男神心無くかいまみたまへば
あやなき涙にくれまどはして

何をか歎く、女神くづをれて
空仰ぎつ合す御たなごころ
憂に堪へかね御心もくれ
黒髪しどろに亂れ紛るる
いや清に目も熒く珠の
契もたえだえ五百箇の御統珠
花より紅きおもち色あせて
何に喩へむこの傷はしさ

切なき別離をとく領りけむ
それかあらぬか問ふも苦き
男神傍に在りと知らさば
かゝる恨の御言なからむに
絶えては續く紅の緒の
繰りかへし繰りかへす御歎き

女神

『盡きよかし、我が血涙となりて

寂しさに憂をつゞけむよりは
『實に頼み無き弱きをみなは
萬の妖にみいらるゝとや
『見るもの、聞くこと、いと多なれば
さこそいまはしさも數あるめれど
『もとより勁き心にしあれば
男はまぎるゝ術多からめ
『をみなの悅び、その悲は

たよる男のたゞまごころにて
『樂みもわづらひの因ぞと
安きにありても後を念はれ
『相對ふうれしさに忘るれど
離れてはさまざまの憂きおもひ
『しめり勝ちなる効なごころの
極みなき苦楚とはづかしめ
『あまりに闊けし天のあはひに

獨り立ちする心の寥しさ

『天なる御父、蠢なる身を
かよわき女を惠みたまへや』

忍び忍びし今日のことあげ
聽き棄てにする如何なる神ぞ

泣かじと男神忍びたまふとも
青き御衣の袖しとどなる

惡きを懲さむ猛雄の力

なでう弱きをいたはらざらむ

我無くは彼の色香も失せて
かたち瘦み萎けいかにくらさむ

任の御勅の背き難くとも
振りすてかねしいざなみの情

神に禱の額をあぐれば
熱き涙に女神觸れける

二

思ひがけなくここに相見るを
天の示現とも疑はれつゝ

女神

『ああゆゝしきやわが那勢の尊
これも現、の夢にかあるらめ』

男神

『何とかしたる、なにもの尊
汝の涙われ拭ひてむ
『何まれ互みに秘すこと無き

いはれ詳に我へ明しね
『相許さゞるおもひあらぬに
いはれ詳に我へ明しね
『あまりに汝いたいけなれば
昨宵の夢も今さめまくす』

女神

『そのあだ夢のあだなる告は
ねぢけし魔神の爲す業にこそ』

男神

『いかにな狂ひそ、心な亂しぞ
何とか誤まる神のよざしを』

女神

『否々、聞きませわが那勢の尊
いつはり多き夢のもとすゑ

『ここより西に往かば伊弉冊
思ふところのみな愜ふべし

『ここより西に往かば伊弉冊

心安かる夫をなも得む

『「かの伊弉諾は勢猛けきも
膽たゞ太く物慢りして

『「憐み露無き醜のあら神
女の涙もをかしとぞ見る」

『夢もてふたり相そむかせむ
これ邪神の聲にあらずや

『かゝる假初のつくりごともて

末來いかに欺かれむか

『憑むは天の御中主の神
天なる御父こそたのまるれ』

聞くや伊弉諾、御鬚さかだて
神怒りに憤りたまふなる

吉凶禍福も事の是も非も
いかゞは御眼に今うつるべき

見上げまつらむも憚り多き

ああ壯なる男神の雄たけび
しばらく暴風に翼をさむる
大鳥にたぐふそのけだかさ

男神の御手を抑へたまひて
御息づかひもあわたゞしげに

女神

『あ、あ、強なるわが那勢の尊、
魂消えぬべうな嚇かしぞ

『その男心と女の情
二つを一つに持てる大神

『大神ならば妖邪何ぞ
かくの如くに我等を侵さうや

『色にいづる憤怒のかくあれとは
豫て待つ禍津魅のはかりごと

『わが身の弱きを詆する口は
汝が逸り氣をも蔑めなむぞ』

御心こめたる御諫めには
いかで御怒もはるけざらむや

三

色ある禽の音を聞きたまひ
天の瓊矛を取り直しつゝ

男神

『我が夢と汝が夢とくらぶるに
惑はし易くもたくみたるかな

『ああわざはひを拂ふは易く

心の魔をばいかに礒すべき

『實にいふ如く我等は神の
かたがた心賜りしなり

『ああ男にはただ慾ありて
女のたからの智慧には疎く

『こゝに男のみ國に盛らば
戰は何時をもて限らむや

『大なる力を壇にして

頑なれば兇殘く眞實なく

『義を害ひ法をゆるがせにし
度を紊りてすさみにすさみ

『心穩ならず悔多く
ゆきさきはかられぬあ命かな

『われ過ちぬ、相別るるは
神の御慮によもあらざらむ

『憎むべきかな、かの惡きものは

造りしところを壞りはすれど
『一事も得爲さで常に造化の
神の末なる末にぞ漫こる』
かくてわが毛と女神の黒髪
二筋一つにつなぎ結び
空にいぶきて神敬々しく
正しくこれを宣誓して曰く

『この柔毛のかく長きが如く
我等が戀は永く强かれ
『この麗毛のかく黑きが如く
濃くなりまされ、いやつぎつぎに』
堅限りなく、横きはみなき
天へ對へばそゞろはづかしく
そぞろ慚しう肌寒むけく
我を忘れて寄りそはれぬる

四

この時乾坤倏ち震ひ
空をよこぎる魔軍六萬
『見ずや、刹那のかの吻ぶれを
見よ、有限のかの秋波を
『いかに爾等、小きものよ
戀に亡びよ、埃のごとく
『爾に息を與へし戀は
爾を冥界にみちびく罪ぞ

『天の清きをけがせや戀に
運の惡きを禀けずや戀に』
天の黑駒馳らせながら
呵々大笑す、八面の鬼

この時、二神腕をくみて
目に見ず、耳に何をか聞くべき

男神

『あ、あ溫き伊弉冊の情

智はこまかにして胸いつくしく

『大極動きて陽まづ生じ
静かにして陰あるや、合して

『萬物この世に榮ある如く
二神の胸を永遠につながむ

『性二つを合さばやがて
大神のごと完かるべし

『董すには威、周ふには愛

威と愛をもて國を治めむ』

女神

『物二つにして全きは無く
かたみに輔けつ相助けられ

『足らぬを補ひ弱きをすくひ
始めて一つのかたちこそ就れ

『再生の道なきわれらゆゑ
この心のみ世に遺さばや

『隙をうかゝふ魔にそなへむには
如かず、二つの魂魄まじゆるに』

五

かたみに空をふりあふぎ見れば
光明溢るる西の炫耀

春のくれなる、秋の紫
百千萬の花やこの花

男神

『我なくて何ぞ汝あらむ。

汝ありてぞ我もかくあれ。
『自己をいみじう愛るに次て
我と同じき物をいつくしむ。
『天縁のはじめ、この心こそ
幸福のもと、この心こそ
『近くは寄りね、頬ずりして
眼を見かはし、互ひの面に
『汝の慰籍、我が福祉を

鏡を見るごと覓めいでなむ』

女神

『實にもいましのの魂ふ如く
いましの心を心となさば
『愛あるところ、不善はあらず
愛あるところ、邪悪ぞ無き』

男神

『我は汝に眞を與へ
天にあでなる生をはじめむ』

女神

『いましに善を我は加へて
天にけだかき命つぐけむ』

男神

『龍たき汝が白きたづむき
疾くわが頸にうちかけたまへ
『わかるるは終に合ふとしいへば
いざいざ元の一に歸らむ』

相擁きつゝ胸のときめき
かれより是に傳へつたへて
昨日をとゝひの睦ならねど
しみじみ戀を今日ぞおぼゆる

附錄 終

明治三十六年二月十七日印刷
明治三十六年二月二十日發行

（日本國歌）
（定價金參拾錢）

著作者　東京市神田區南甲賀町八番地　平木照雄

發行者　東京市牛込區市谷加賀町壹丁目拾二番地　山縣操

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町壹丁目拾二番地　青木弘

印刷所　株式會社　秀英舍第一工場

發行所　東京市神田區南甲賀町八番地
內外出版協會
（電話番號本局三千二百四十六番）

不許複製

著新妙美田山
談史戰義賓律比

どるなぎあ

《版三第》
冊二全
《錢六稅郵　錢拾五金價定》
前編に對する批評一斑

《日本人》アギナルド、其人は革命の偉男子として、義軍の勇將として一たび自由と獨立とを得んが爲め、壓制と暴力とに逆ひ抗し、纏てば其贏ち得たる自由と獨立とを保たんが爲めに壓制と暴力とに逆ひ抗し、而して時利あらず、運拙く、最後の一彈一劍折るゝまで戰ふの決心を持し、不幸にも敵人の詭計に陷りて捕虜と爲りたる者、其一身の履歷の多變なる、實に現代稀れに見る所。本書は雅健自在なる山田美妙氏の筆を以て叙したるアギナルドの事歷を述べたるもの、其出生に筆を肯け島民に自由思想を皷吹して革命の氣運を作り出したるリサアル博士の事歷を錯綜して此多變多趣なる事歷を述べ、其刑死の態を述べ、博士の未亡人たる女丈夫ジョセフィン人の健氣なる行事に筆を止め、曲さに叙事の妙と結構の巧とを極め、讀む者をして壯快の念と悲慘の感と交るゝ々起るを禁じ得ざらしめたる實業之日本》アギナルドの面目は躍如として紙上に現はれリサールの沈勇ジョセフヒンの貞操は宛として一場の小說に似たり。文章流麗眞に人をして情迫り感に堪へざらしむる所あり。深き同情を以て通讀を禁じ得ざらしむ。

《中外英字新聞》文の變化氣魄に富み言文一致の模範たること今更茲に喋々するを要せず。其中の壓卷とも謂ふべきは博士リサアルが刑場の露と消ゆる顚末を記したる所にして此志士辭世の長篇を新體詩に譯す。其詩最も悲壯讀者をして斷腸に堪へざらしむ。

萬朝報英文記者
山縣五十雄註譯

英文學研究

《全六冊定價金壹圓＊＊郵稅拾錢》

《國民新聞》ウイクトリア朝の文豪サッカレーの『メーリー、アンセルの話』を、叮嚀親切に註釋し、且つ巧妙なる譯文を添へて出版したるもの、即ち本書なり。著者は本邦有數の英學者、其註釋に於ても些の誤謬をなさず、誤謬をなさゞるのみならず、讀者をして此の小說の眞趣を味ひ得しむるに足々の手腕を揮へり。

《東京朝日新聞》今の英國文壇に於て巔新とを併せ有し、其著作一として江湖に歡迎せられざるなきは獨りドクトルエルを註釋し、翻譯し、附するに原文、著者の肖像及び小傳を以てしたり。著者は曩に英文學研究第一冊を公にして英學生を益したる山縣氏にして、本書は即其第二冊なり。

《都新聞》註釋更に加はり、譯文更に丁寧なるを以て、啻に英學生の津梁たるのみならず、外國文學を味はんとする者にも原文の妙を覺り得べし。

《中學英語》文の婉麗と想の奇拔と脚色の詩、文學の中にありて最も難く、學んで白頭に至りて、猶ほ其の力足らざるを嘆ずるもの少なしとせず、詩を解するの難き、往々にして詩を作るの難きよりも難きものあり、西詩に於て殊に然りとなす。然れども西洋の文學を知らんと欲せば、必ず其詩を學ばざるべからず、此書收むる所の詩二十篇、首に原詩を錄し、次に大意を譯し、難解の語を選びて簡明なる說明を與へ、且つ一篇毎に評註を附して原詩の意義を明らかにするの便に供するなど、用意頗る周到なるを見る、青年學生は之に依りて觀念を得るならん。

《時事新報》近時英語界の出版物中其白眉たるものを求めば蓋し此叢書の外に出づるものなからむ。學生諸子譯解力を上進せしむること實に驚くべきものあり。此書に依りて學得せば、其新刊としてポーの『The Gold Bug』『寶ほり』出づ。其譯註の周匝正確なるは吾人の誇つて介する所のものたり。

伊藤銀月新著

最新東京繁昌記

全二冊

《定價金五拾錢 郵税六錢》

世人新式の東京繁昌記を渇望すること久し、而して今や漸く此書の出づるを見る。裝釘高雅、内容洗錬、東京土産として地方への寄贈品に絶好なるのみならず。東京人は自己の面を照らす明鏡として必ず一本を座右に備へざるべからず。江戸時代に於ける寺門静軒が繁昌記、明治と云へど三昔し前に出でたる服部誠一が新繁昌記、倶に一時の大都を描寫すべく頗る勉めたりと雖も、未だ文の爲めに事を設けたるの痕跡を脱せずして、二十世紀の塵裡詩人銀月君が新頭腦に映じたる最新東京の、爾く驚歎すべく、爾く玩味すべく、爾く研究すべきに匹敵すること能はざるなり。一たび此書を繙かば、既に斯の如く萬人の手垢に汚れたる店晒的東京が、一洗して始めて網に上りたる佃の白魚となり、始めて市に出でたる淺草海苔となり、讀者をして其新鮮なる特殊の妙味に舌を彈ずるの快あらしめん。

堺枯川編輯

家庭夜話

全三冊

《定價金壹圓 郵税拾錢》

第一冊子孫繁昌の話
第二冊質素儉約の話
第三冊仁慈博愛の話

各冊 定價參拾五錢
讀切 郵税四錢宛

時事新報評＝家庭の新風味の著者堺枯川氏がゾラの最近の作フェコンヂテの梗概を譯述したるものにして題して『子孫繁昌の話』といふ著者が其はしがきに於て述べたる如く眞に**趣味**ある**教訓**ある**善き話**にして**最も家庭の讀物に適せり**著者が此種の書を選びて荒び果てたる我家庭に一道の陽光を與へんとする其用意多とするに足る敢て原書の字句を拾はず**平易通俗**の物語として婦女子にも讀み得るやうに書きなしたる其苦心察するに餘りあり。第二冊はゴールドスミスの傑作ヴィカー・ヲフ・ウエ！キフィルド第三冊はビーチャー・ストウ女史の名著アンクル・トムス・ケビンの概要を譯出する筈

萬朝報評＝全篇の**脚色**如何にも**趣味**がある**教訓**がある世に幸福勞働といふ言葉の眞意義が如何にも愉快に發揮されて居る『眞の、眞の婦人の美』の一節の如き『麥も子供も育つて行く』の一節の如き讀み行くうちに身躰の念全く消えて精神極めて爽やかになるを覺えるそれて人生の運命波瀾を描くに最も寫實的だから面白い**編者が言文一致文**の**簡勁明晰流暢**なのは言ふ迄もない云々

瀧澤秋曉著

有明月

（定價廿五錢　郵税四錢）

衆星絢爛たる今の文壇に立ちて一異彩を放ち江湖の環視を惹けるものなる瀧澤秋曉氏となす氏今會心の諸作を輯めて『有明月』を編せらる收むる所美文あり韻文あり小説あり爽朗なる筆は晴空の氷輪の如く淡宕なるは白露の江に横ぼる如く字々絶えて尖巧細腻の態を存せず全篇皆是著者獨得の心情畫展べ來りて興の酣と瀕氣の流露と他に索め得可からざるの妙あり

次目

廢園　菩薩血
鏡の淨玻璃　寫生山水
鑛脈立待月　元旦の田舍
四夫の悔　垣間見
山百合　即興
無情妙義の秋
廣寒殿の秋　流水
浪花一枝　道
へし雲がくれ
客　ねみだれ髪
あらぬ浮名　常陸へのか
我がイヽゼルの關　秋思の
とこよ

小島烏水著

銀河

（定價廿五錢　郵税四錢）

《毎日新聞》　小島烏水氏の著、自題に曰く「夜ごと夜ごと深き思を宿したる、星が落ち散る石のきれ屑」と、然り氏の舊作を蒐めたるもの、冬の富士あり、法師蟬あり戯悔あり、湖論あり、紀行もあ論もあり、評論もあり、何れも詩情にて充てる文字れば雑録もあり、評論もあり、何れも詩情にて充てる文字を以て行られ、讀打たれしむ。表裝及び挿畫は近時專ら流行せる一條成美氏の手になむ者をして一種の崇嚴なる感想に紀行文に於て然りとなす。或一輩の如れるが、其楚々たる高尚の風致ある所は、甘いものなり。

《大阪毎日新聞》　由來烏水が叙事文典雅穩健にして優に一家を成すものあり、特に紀行文に於て然りとなす。或一輩の如き漫に章句を飾るの厭味なきは多となすべし清新の文字。

《都新聞》　烏水氏の文霸氣横逸些しの嫌味なく誠に愛好すべし。例へば銀河の横さまに碧落を渡りて聲なく流るゝが如し。

河井醉茗作

無弦弓

（再版　定價金參拾錢　郵税四錢）

其想や高潔其調や流麗而して其人や溫厚嫻雅始終轍を世の詩人と同うせざるものこれ我が河井醉茗氏を措いて他に見るを得ざる所にあらずや『無弦弓』は氏が多年の述作に就いて其の精華を蒐め來るもの今青年畫家中の俊才一條成美君に囑して新たに其挿畫をつくらしめ裝釘の美を整へてこれを世に紹介す

次目

妹　胡蝶の墓　紅芙蓉
希臘牛島　湯の香　蛙の聲
いさよふ雲　行く春　くざくら
大雪小雪　みづわか草　やはじぼ
月のはえ　ちぬの海　露の玉章
夕の聲　朝の聲　春風怨
小羊　漫吟　戀の神
曙の里　經木流し　天女の聲
山水秀　自然の文　星の光
冴ゆる夜　花すみれ　あじろ守
浦なれ衣　殘る心　罪の終
征矢獵矢

（短篇十數章）

河井醉茗編纂

詩美幽韻

（定價金貳拾錢　郵税二錢）

所謂少年園派の新體詩集なり　**偉**なる**方今新詩壇上稀に見る所の作**して夜雨の『いてふ集』露子の『吾嬬布里』秋曉の『春宵毫獨賦』其他和郷白浪紫紅醉茗等の作何れも誦すべく謠ふべし（家族）

本書は文庫派詩壇の驍將河井醉茗氏が同派青年詩人の新體詩中**掲載**する**十五篇婉麗**なる**嶄新**なる**崇高**なる**雄**すゞしのや夜雨露子秋曉歌二編者醉茗のなどは手馴れたるものと思はれたり批評子はこれを**新體詩好個の教科書**として世の少壯諸君に薦むるに躊躇せず

夫れと花あやめ引きぞわづらふ秀逸のみ

金玉の作數十篇を精選して編纂したるものなり

いづれを取わけて

（學園）

毎月十五日發行
○定價拾貳錢○
六冊前金六拾六
錢○拾貳冊前金
壹圓貳拾錢○一

文庫

ヶ年（定期增刊
四冊共）前金壹
圓六拾錢○郵稅
壹錢宛○見本郵
券代用拾貳錢

文庫は明治二十二年の創刊にして隆替常なき文學雜誌中最古く最堅固に發行部數最多く讀書社會に最勢力を有す（近來本誌の雄風を羨みて摸倣するもの相踵ぐを以て觀るも其版圖の益々擴大するを知るに足らむ）本誌の特色は虛名なく實力ある天下の秀才を一堂に招き集むるに在り凡そ新文士を待つこと最自由に最公平なる本誌に若くはなく趣味の清新材料の豐富亦竊に自ら許す所（その徹頭徹尾青年作家の紹介を以て自ら任じ未だ曾て渝らざること十年一日の如くなるは明治文壇空前の事業にして又本誌の獨壇世の名を青年雜誌に假託して事實は却てこれと表裏するものと自ら其撰を異にするを確信す）天下の俊髦冀くは競うて趨り來り本誌の微志を成さしめよ